





18
1833
14

繪本左圖記二篇卷之二

目録

後右郎計畧隔_二竹ヶ峯城_一

合ヶ橋城落_二石_一

信長勢敗_二表退去_一

後右郎後殿軍配

繪本左圖記二篇卷之二

後右郎破朝倉義景

信長帰城於岐阜

繪本右圖記二篇卷之二

後右郎計畧陷三筒ヶ峯城

永祿十三年多号改元ありて元龜元年と爲り此れ信長
卿惣別を平定し其威名隣國に震ひ教て敵討する者は
安んぢけり越前の朝倉義景を誅戮せんとして二月下旬上洛
てく將軍と謂ひ朝倉征伐の台命をう受將く在系して
系部のはる多分沙汰せしるふ三好松永が惡政をあらたけ
邪をいし直を勧めしめし仁政をせしめ彼惡政は
く訓する所人百姓俄に政道改りしに候ふ者すいてよき
いざる者も又なかりたり人の病む者も又艾灸するがごとく病
根を治するごとくも其苦悩を苦むいする者もまたなりん



るる即計略
の
城を
陥
す

信長卿の本陣中井藤菴が門柱は落首して押さうろ
 うとて信長や思はれんと三奴ぞ今いらひしき
 ころに信長卿畿内東山の軍勢十万余騎を引率に付
 廿日京都と出馬ありて廿八日越前敦賀の府に到りて
 朝倉義系兼て防戦の使をぬき、富井金ヶ崎の城に就き
 羽州第一の勇士細倉中務少輔系恒を大將として選兵勝つて
 三万余人籠城し又同郡の竹が峯又新又城を築き寺田宗女
 正田右近は浪甚に即九段を女等分ちて是も別兵一々
 五百余人揃籠金ヶ崎となぐいとお抜けて信長を防んと信長
 其儘ありて諸將を集めて軍の陣儀を定め明智十玄清光
 秀やうらゐ某曾て朝倉が家に客より時よりく彼等の心とま

をんぬる義系系弱しと諸士も又智勇の者は今此金ヶ崎に
 籠りし中務少輔系恒は越前一の勇將もつて此者を討
 る所を越前征とす其利あり先き竹が峯又押への勢を盡
 大軍を以て金ヶ崎を攻めんとす本下石井即進んでやうらひ中
 務系恒智勇のゆゑに金ヶ崎の要害を守らば容易は落城と
 ぞうと先き竹が峯の城を今日一日攻落し敵の勇将とら
 くべし其計策はうやうやと素べしと先秀はさう中とられ先秀
 おぼしめ其計甚妙なりとくゆいあべしとて明智本下兩人
 信長卿に計畧の次第を言しとて心を定めていひくは落
 が峯の城へぞゆひる松山手筒ヶ峯とて三方の平地より多
 擧ぐり度沼とて人馬の近引自はたしに城中切面を斬んて擧



其二

貞顯言二外傳卷二

うと信長卿を五郎左衛門明智十左衛門内務助五
余人擲り美来り彼廣石と厭ひかくるべくあてて攻
めしる元来此石を勢なれば防く者一人もあらず一
日なかり入るや火を掛て焼くれば三方の要害も悉く
焼く城を破るにや大なる寺田本如所浪甚に即ちもつ
て防ぎ我ひたれと今いふんぞ敵とて皆自害しと死し
たりと兵も或い討て又い落れ生捕とに討て又い落
れ信長源くよりい諸士の働きを称しあふ

金ヶ崎の城落着

さう程中務お捕系恒へは守が峯の後詰して本下
が焼く戦ひし小田勢金ヶ崎を攻るよりをいふ大なる
勢をいふ

其通して佐久間信盛元重三左衛門馬計多延照五
余人系恒の勢をいふ圍とのをいふと戦ふより中務
お捕系恒の斗又落入よりといふ士卒をいふは必
く勇を震ふて血戦し一方を切崩し圍をいふ味方
をいふれば一々斗い討められと勇をいふ落れと
自ら願して金ヶ崎へといふと佐久間元重の三
左衛門に付て追詰め入みせんと進むに金
ヶ崎の城中よりこれをいふ城戸をいふと討て出
系恒とたしけおまへ両家の勇士は又命と
経んと名をいふ必死あめて我へは死傷の者
救をいふ朝倉家の勇士三左衛門七郎
即ち即ち九郎門と田兵部美本五郎九郎門中村
兵庫富田中務石田新左衛門茶波五郎菅野六郎九郎門
岩



丹波元衛門就尾三郎右衛門水間大八郎小幡權元衛門
萩原十左衛門等を始末として名ある勇士五百余人
討死し其隙に惣軍城中に入り城戸を固めて防ぎ
けし信長勢も終に付入る事なれど兵士引上げ退き
此時信長方にも森三十郎三輪与市郎素原源九衛門
丹羽新藤左衛門源五郎など約三百余人討死し其日
の軍止まり明日に月廿六日信長卿惣軍を引率し
金ヶ崎を追ひ至る頃さうで妻られける城中も家と破ら
れどときびしく防ぎ戦へどもきのこの戦ひは名ある勇士
悉く討死し今に後より余餘りて籠りたれいんとや
信長の大軍と防ぎ支度なき隙に落城と見えたりける此時木下

友吉即信長卿の御前に出てやううの今に又此城を攻め
も地よりゆる此時君城中へ使者をきて用城を進め給え
城兵も九死をえて一生を得しむ城を即日此城味方の
まへへ若力攻め妻付めける城の中勢も順死地に入て防ぎ
戦ひ一昨日も支へる朝倉義景大軍と後諸軍出さば
頗る落着けり又一つは君の國を征しあふし殺戮
を好み給ひ仁恵を以ておし人民を安んず給ふと風を
せば是又征第一の計畧なり義系後諸の勢と出さば
あに又く此城を得めざるしとやこれ信長此城は日
後者を以て用城を勧めける城の中も不詮龍城叶ふに在
思ふに先城を用いしと命を令しきて計強と見えん

其二



真經記二篇卷二

真經記二篇卷二



と評然一交一用城と云き有返着よ及びこれ信長卿下を
を傳人四方の妻ワ成退う一川流石衛門山田三郎左衛
門面人を城中とせ一改めく城を受え一む中務系
順懸勤又城を後一士卒を引一着中をに退
きう実み抄い一竹ヶ峯金ヶ崎二日の内は落城
これ信長の軍勢物より一と勇ぬ者なりうう

信長勢數表退去

越前第一の要害は筒ヶ峯金ヶ崎の両城二日の内は落城
これ信長卿御より一限りなく諸軍勢勇進
んで出又奥一城入一義系を討滅んと後せられうが
忽端の後に起り心征心は任せに其れに及小谷の

城主淺井下總守久政曰彼等も長政又信長卿と親族
の因をぬと一も去る軍の御所造營の期より一
又隔心ありて動石はの模様あり一が今度信長上洛
ありと石をに越前へ出馬せられ一石倉と相搦んで
信長が後を討んと此計議少しく其調なきに
どりと石倉と出馬とい両家は相持くが元盟約あり
故に去る永祿十一年信長政縁者の陸ひありし時信長石
倉に對し地をかう一軍をかう一あづかう一松平氏を
かたみし一僧より地より信長卿軍とにえと一命を
一振り一軍を動一越前入一城入一限りうた表裏
ありと長政其外淺井一家の安皆信長を討て石倉の

信長敦賀
表退去



盟約めいやくよそむくのと罵ののしり多おほく此こ時とき後ご其その功こう居ゐ遠とほ辰しん在あ門かど是こゝを
 深ふかく歎なげき此こ所ところにこそ先まづ年とし佐さ和わ山さんの菩ぼ提だい院いんにて盟めい會かい乃すなは時
 信のぶ長ながを討うぐべしと再三さんさん云いふ所ところに進しんちあらせして
 御み父ふ子こも又また許こころ容ようなく今いま信のぶ長ながの威い勢せい強かうちなり救す十じ万
 の大おほ軍ぐんを領りやうしお軍ぐん家の命いのちと既いに頂うけき著あるく天てん下かを征せい伐はく
 といひ龍りゆうの雲うんを得えたるがごとく此こ時とき又また云いふ所ところに
 國くにの兵へいを以もつて信のぶ長なが又また敵てき對たいせん自みづか威う之を振ふるさるゝあらは
 じや信のぶ長ながに固かたを深ふかくむとび御み倉くらの盟めい約やくを棄すてし當あた家け長
 久ひさのをうることをせあらまらせとさましき海うみ止とどむれと長なが政まさ
 父ちち子こ曾そうて義ぎ引ひち軍ぐん勢せいを僅さ足たりし信のぶ長ながが御み路みち所ところ討うぐとく
 進しんんく後あと又またせしるべしと其その利り意い固こく之これを去され又また信のぶ長なが郷かう乃すなは陳ちん

中津井父子新倉より力と合せ指旗で攻めよう。さうくは降参
し強しなり多れば信長卿松永彈正久秀を逃くまのき
進退の計を尋ねよ。是れ松永信長の陣中であらうとて
とも信長曾て心をあやましむ。今津井後又致して信長卿
難依の合戦ありければ態々松永又進退を尋問ひ久秀が本
意を探り見ゆ。松永元来邪智深き老叟の武者となり
む信長卿の心を誘ひ言ふに是れ多きは若御威光強く
多角金ヶ崎の両城忽隔小國悉く振ひ返り足をはかすべ
勝利は使へ一魁もよく降参ぬ。然るべし前後又款を受け
てい合戦難成あらうべしと言ふと信長完承として老人の軍
議をきりてその攻國の用意し給ひ多時又丹候馳入り新倉

勢三万計義系も出馬と云ふよりりんでる府中と来
たりと告ぐれば信長の軍兵大に發ぎ船倉が勢を向て我
とふもあり又く退て敵の前後を塞ぐれんと罵もあり陸中
又く静たうに後者即進み出くやうに船倉大軍にて後浩
ととば憎くも此に止り給ふるうに君の御旗むうりと熱勢
の中をうゝ立むるより退くべし君の旗本の勢を引率し
密に閑道より御到りて一渡り勢君の御旗をうゝ抱あう
喰止る我のべし其隙は又く陣圓し給ふんは何れも
之く其の勢を以て此に止り船倉勢何十万押寄いとも
是より先へ二人も通ひいまだ若此後殿は換ふに抱あう
再君の湯へせし一命よりけて我の心をたし人項羽樊噲と
し

しる多向ひ来りしものと二日三日もころんでやけき御
給安く思ひしやれまのうに陣圓し給ふるし御側の
も後より我の用いしめて若く守護し退くべしとこそ勇ま
しくやゝをなせば信長卿と云ふ系うせ並居る諸軍一
又皆本とて渡りてま陣しきおかれはこふの論も及
むに給ふる勢をまゝつとひくは退きさう

後者即後殿軍配

日月廿八日の申の尅後者即が軍配はまうせ大に信長卿
森佐久間麻重田佐々等三子餘騎ふくは誠と困る我退
給ふ本道に柴田坂其明智池多峰谷福留其外は換
軍勢都合六万余騎信長卿の御旗と押立長柄の鎧とた

後
殿
軍
配



つゝ信使を亂れ引さうる浅井俊成も長政の奉願寺の門
後をかたらし其勢一万余騎の切不な待うけを統と飛一
國を焼くてまへり柴田勝家坂本右近明智光秀為計多延
興何ういふも信使がれど門と喚て突立き浅井勢は
らひひく右近左近と逐うるが中頼寺の門後等去地案
内の者方れは安を馳ぬけ彼不に死れ鉄炮をそおとく先
たれははしり勇も一信長の軍卒にやういへく進み得ど此所
浅井長政の信長の旗本一切の雌雄と交せんともた國より
伺ひるふ此軍中又信長ありは死にく旗のくまふれは
叔の信長の地のもるより退く物あらん今の戦ひも互益と
軍勢をまふり引さうる信長勢も又戦ひと奴どもへく

と坂本を引さうる信長郷の亦下が軍配のぶくさる敵一人
もかく若及左柿又若く之は栗谷城の中守御供とて疾
中松明をとりし徳川を経て江州杉本谷を通りたきふふ
杉本信濃守出迎へ城中又拒しきまへく餐應かきなり
日三十日京都は若く引さうる叔も亦下若吉郎の徒も勢
三万余人して金ヶ崎より諸勇士が集り自領を極くや
るに我此不にく船倉の大軍を引け奇代の功を立て味方の
諸士が眠をえとく一午候をみて船倉が軍勢を伺ふに今
宵成利をうりよ此不に若く我奇斗をみて大軍の形勢
をみさへ栗谷の義系獲りよとまじと城外は陣取も長途の
労もみ休むと陣取は法あり城取もなり或は十町又十二

三丁より宿陣より一軍家にあひく大陣定り一法令
かり義系寛めてこれより味方乃兵一五人城より十余面
て左右より進出伏せしお家の出所あけりやうく又戦ふ
どしと勝領望小六兄弟と大おとめと令と下せば小六又
十郎兵衛と引てお立ちし又堀尾茂助福岡大炊重山朝
七月小助長にす之無川口久助日比野六を交り百人の兵
卒より四方のよりお立ちし又教と樹木の枝より松明を
くり付お家の出所あけり一日より其松明より火を付紙を旗
に物をおへ置きしとおて火うげと細細と一堀尾次下
の勇士下をうけり軍卒と引てより又朝野弥平を
を右ては又百人の士卒と引て金ヶ崎の左右のよりし無を

多く焚き大軍陣せし援援を必し敵の軍卒と懸ひせむ
どし朝野弥平君令と引し士卒を引てより又
くお立ちし又朝野弥平君令と引し士卒を引てより又
堀尾の方より陣を右旗旗槍力ときり又進出時刻の
を待よりり

後吉郎破朝倉義景

朝倉義景は義系に後安父より信長とに
援て討えんと一族朝倉武部右衛門義景は中勢を
破れ義系は城の中より都合三万より余餘一系が
よりりて教を表へ教向と時より月廿八日書りて
陣遙より金ヶ崎のありさまを伺ひ見る小幡彦に物のあやめ



足利
 義満
 船倉
 義隆
 子

うづも城の中を右のうづもへ信長の軍勢移しく陣を
無の光りてと照し旗指物風より六七万の軍勢屯
せりと見えしに信長いまだ退くぞ此所に在と申すれど
今宵に安んず陣を味方人馬の勞を休め明日より
信長の退くぞ其計又退討せん金ヶ崎より十町計はな
る陣所構へ長途の勞を休め此より本下辰吉郎の船倉勢
の野陣せしと見え我斗略せしと見え辰吉郎の船倉
一より百人悉く金ヶ崎を渡し船倉が陣所にあり卒に
鯨波を渡し金ヶ崎を著せし文字より船倉勢と云ふ
辰吉郎の船倉を立し実崩せし中務系恒士卒と云
して我より本下辰吉郎即時分りしとお國の狼煙と揚る

と見えしに左右の岩のうづもへ埋伏しし本下勢一日に
國を作り構へしと見え松明と悉く火を附し其いし
白日のうづもに幾千の軍勢一時に渡りしと見え
のうづもに軍勢と見えしに船倉勢此陣と
見えしに辰吉郎の船倉を渡ししと見えしに
我より一人もあらず我先よと逃げ出で討るしと見え
けど親國と見えしと見え余は見えしと見えしと見え
と本下が軍兵我よりと見えしと見えしと見えしと見え
助後市松切松作を渡ししと見えしと見えしと見えしと見え
これに討る者殺ししと見えしと見えしと見えしと見えしと見え



されども新倉系統は系順承故に坂が輩物訓ふる勇士うれ
味方を下知し疾討いきりて小勢ある者あるぞ心とまげり
歟と防ぎ日士討して味方を換むるともくわけざれど
大勢の崩とまじくせかれに勇将ある輩も働くるを
まきむるにふりいたる泥に足踏みあき使もまじく
後陣の方より火の多に揚げ率又固の要ふが成るに
勇將後須賀足元一万余人を右にかきと本陣と切くば
大將義系大に驅る馬と打て進出まき今ハ防んとて兵
一人もたぐ熱級軍とありて思ひく心くは落しけり本下勢
二万余百人前後より指挟あきを要に切崩し二里半進んて
引くせば疾いかのくと明らけり此戦歟を討つハ余人

味方の小員一人もたぐ勝因を揚げ歟の捨る馬武具捨
あつたをえん誠意の士産けりといふと勇とよろこび熱勢合せ
三万余人威風あつてを拂ひまづくと引るハいかなる例
がき後殿やと称ぬ人こそなるまづ

信長帰城於岐阜

此時信長郷に急かり京都へ入らせ給ふハ本所の軍勢業
固計は森明智を退くハ系統一君臣とも互ふと候
道ハ合戦の次第はまじく言上ハ信長郷ま
又褒詞恩賞を下し賜ひ其功勞を称し給ふ候も本下
及即敦賀表の後殿よりとまじく今又押ひくる候も
安んじ信長殊に案じ給ひ坂本右近麻惠田政元衛門あ人

又三々余騎の還無をばしそふとむういのおなるより向へ
せ給ふ故に惠多命を令し軍勢を引率しとせしうくうま
に足坂かつて本下着吉郎勝軍を引て攻圍せしふ合しう
三おまゝ又着たれうくうびをのへ信長郷の合に夢りむい
のおまゝうくうはしやくれ着吉郎の厚睦に拜附しおつて
京都又ゆりくれ信長大にほびあひ着吉郎と石出され軍乃
始終と見あふ着吉郎取り新倉義系自三万又々余騎を引
率し君の御後成追せんと金ヶ崎へゆいりども一戦は打破
討た首ハ々余味方の士卒一人も死傷の者なく多くに引
けり是令し君の洪福はよりるなり依て小園の土産より賢免
に入ると拾ひ集めし強馬二十三疋鉄炮三百七十挺其外鎗を

刀懸程亦ゆびにしく御前に候是れは、大なる成をなせり
 世一座の諸士亦大に感^{うれ}ず、大なるの退口をも勢^{いき}を向ふまゝ
 小勢を以て大敵をお破^{やぶ}り、味方の士卒一騎も換^かへられ
 一武具馬具兵器^{ぶき}もかくまを多く奪^とえり。古今未^こるま
 のる名^なと頻^{しばしば}に感^{かん}称^{しょう}し、あひたる叔父五月九日信長郷
 本國^{くに}に濃^の國^の一先^{さき}ゆり、給^{たま}ふとて其用^{もち}を^し所^しに^しあふ
 安^{やす}と近^き江の國司より、仇^{あだ}く本六角入道兼復^{とく}の先年信
 長が、おみ本城を退^ひき、さる石部^{いしべ}の城^{やしろ}に居^ゐるが小田
 淺井親族^{しんぞく}の因^{ゆゑ}と忽^{たちまち}に、今我^{われ}に及^{およ}ぶ所^{ところ}なれ、いふに
 一多^{おほ}信長と討^うち、旧眼^{きゅうがん}をさるさん、ものと仇^{あだ}く本家^{ほんけ}淺代^{せんしろ}
 の浪人^{らうじん}近江^{おうみ}の郷民^{きやうみん}等^らをかたらし、鯨江^{くじやう}の城^{やしろ}に播磨^{はりま}信長が



帰修成より討るんと計るゝ叡山の衆徒等もこの
 信長を眼と居たり信長滅せんとを志すに思ふ
 此度信長誠意に就入して和倉の衆も又山門
 の安し其男其女一ツたり和倉の衆も又山門
 一山の衆徒悉く義系と親しむれば義系後者を山門
 と繋し合せ信長が和修成討んとす山門も棄て信長と惡
 しむぬれば和倉の衆も信長を志すに企てぬ
 山は破滅となりぬと衆徒等は一ツに志す
 山根の若住房より衆徒等あり後炮の如く翔る
 衆は柳葉城費く此席よりて降参をせざるが進み出て

今一山の衆も浅井佐々木のお力を以て信長と戦ふ
 も信長を討得んやあがつまは自決討りして信長を
 又降國せば限りある事を志すに就し終る信長
 が山門退却せざる我は思うに要するもの
 信長一人を殺さず一人を討んとすまじか
 五百七百の法師武者が向ひし信長が首をさるる
 かりにたある危き計儀をいさんより我一人を死と捉げ
 山をとり信長がゆるるに理伏して只一炮をお殺さん
 何の細うづきぞや若仕換へ生捕るゝ討死とす
 是又我一人を死に換へ信長が死にこれ両金の
 謀りなりやと一山の衆徒等を志すに就き此謀



其二

東國言二卷之二

極めく妙方なり若くはなれば當分の業何れこれ
 又あつん家又妙しく若恒房衣の下に後事をまゐる統と
 推考へ不敵なり只一人に成り信長郷の政務に任じ居る
 多分は同月十九日信長歸國の用急悉くこの京都を
 立せぬし船まで湖を渡り野洲に系し掛り給ふは統々
 本が勢三子斗切不承寒い結うけより信長くと思た
 まい坂おの計を慮ま統々命令し追ちせよと下知しぬ
 いかしこまの我一は會釈もたつ統々本勢の美市一丈
 字に切て入振振五重は難まれば集り勢の御民系何れ
 かつもさる人きに方へんと迎ちつる統々本義理あせ
 て不承とつても返し合とりのもたつ遠いのがれ給はて

そ迎入る小田勢に迎る款を返とてつと徐く退る
 又日野の城を蒲生右兵衛と秀次所逐つて来
 上一本道に一揆なり蜂起しつて往來逐つて難ぬ
 だしとて自ら案内する種城の山より進み此
 山門の若恒房を中門し小田勢の山に付て志のび来
 しが種城の間より退き給ふよりを度越の山と先
 へ城へ九折なる切石の添へ本意を告げ今やつと
 結つるつる種城と若恒房の諸士軍卒とつと結ぶ
 大お信長陣に織を告し馬をささがり彼九折に
 けり給ふ若恒房結まけつるつるれはよく知らひて切
 放つは信長の運や強うもらん種城の御所おめを
 放つは信長の運や強うもらん種城の御所おめを

馬より急つがかり信長卿の旗幸さちをみて疾はやに馳はりて曲まがりて
いさなれ搦捕なつとて背かを挫くんとていり得物追えててこよ
安やすくいゝめたる所信長太おにこれを制とりて候まうふ歩あゆ給たまふ
最もよき候まうふ所信長太おにこれを制とりて候まうふ歩あゆ給たまふ
振ふるいせ給たまふ



繪本古図記二篇卷之二終

